

論 論

大林太良 三人のパネリストのお話からいろいろ面白い問題が出てきました。

一つは、神話・伝説・昔話・笑い話・英雄叙事詩というようなジャンルによって、動物に対する見方が非常に違う。当然、それならば、昔話のレベルにおいて、鮭はいつたいどうなのかというような問題にもなるかと思います。

それからもう一つは、シャマニズムとの関係が、朝鮮あるいは沿海州の地域において、動物の関する話で重要な問題として出てくるのではないか。そうすると、では日本においてはどうであろうかといふ問題もあります。それから、違う種類の動物同士の関係、例えば熊とトドが格闘するとか、そういう例を挙げられたけれども、余り深いところまで話が及びませんでした。それらの点を含めて、三人のパネリストの補足、あるいは質疑応答にしたいと思います。

大友義助 萩原さんから「変身」のお話がございました。日本の昔話の中に現れる「姥皮」と「変身する」ということの関連を、どうお考えか、お話をいただければありがたいのですが。

萩原真子 「姥皮」という話は、獸の皮じゃなくて、何か大変醜いおばあさんの姿に変身する手段じゃなかつたでしょうか。私の話した変身は人間が何か着て、その人、つまり人格は変わらない。虎は虎であつて、虎そのものである。ただ、皮を脱げば人間の姿になる

だけであつて、人格的には変わらないんですね。この変身というのはその衣を取つたり脱いだりする。そしてそれで変身するというの

は日本海北側からオホーツク海、太平洋北西海岸まで広まっています。北東シベリアのパレオアジア諸族でも大変に盛なんですね。

あそこでは文化英雄である大ガラスも簡単にカラスの羽を着て、カラスになつて空へ飛んでいく。脱いで地上では文化英雄として人間

の姿になります。それが、例えば仮面の下には人間の顔があるといふ観念になるわけで、そういうふうに変身を広い意味で考えてみると、姥皮というのは一時的な相手を欺くための、本性を隠すための仮装であつて、変身とはどうも違うような気がします。

私は鮭のお話を伺いながら、日本海の沿岸では鮭をどういうふうに食べたのかなということを考えたんです。捕獲した鮭はどんなふうな処理の仕方をしたんでしょうか。それと、松原さんが朝鮮半島では鮭が余り利用されていない、鮭の伝承が少ないとということをおっしゃいました。実は、北のほうでも、日本と同じく鮭は大変重要な食料なんですけれども、伝承の中には出てこないみたいですね。これは、見落とされないと考へるよりは、やはり、それほど典型的ではないと想像するしかないんです。アイヌの場合もそつだと思ひます。そのあたりもかねて、日本海沿岸では鮭をどういうふうに利用したんでしょうね。

大友義助 現在のことしかわからないのですけれども、鮭は全部が無駄なく利用できる。頭は頭で、骨は骨で、身の部分は全くそのとおりであるわけです。聞くところによりますと、鮭の捕れる場所からして問題のようです。つまり、川を遡上するのは産卵のためです

が、それで鮭の体の全精力が産卵で使い果たされてしまう。それで、イクラがそれる状態になると鮭はうまくなく、腹に抱いている卵がまだ未熟のときが一番おいしい。ですから、最上川については、どの場所までが一番おいしいかというと、庄内の平田町の相沢川が流れ込む場所までだといふんですね。

また、食べ方ですが、腹を割いて、塩を詰めて、縄で縛って、尾を上にして下げておくことが多いようです。ですから、荒巻ということばが起る。三面のはうですと、そのように処理した鮭を逆さに下げて、冬でもそのまま通しているようです。ですから、この方法はかなり保存がきくということだと思います。卵もまた、様々な保存がきくので、塩漬とか、いわゆる筋子にします。頭は、鼻の骨をどけて生酢に入れる。氷頭生酢がこれです。そのような鮭の料理法は非常に数が多いようです。イクラをただ大根おろしに入れるところ、骨をどうするとか、数は非常に多くて、全く無駄がない。

記録の上で見ます鮭も、どのように見られているのか。例えは、

江戸時代。先程の三面川に上がる鮭というのも大変に数が多く、藩政時代の中頃ごろから、ご承知のように卵を採卵しまして、稚魚を取つてから川に放すという、現在のようなやり方をもう確立してい

たようでした。そこから得る利益で、村上藩は藩士の子弟の奨学資金にしている例もあり、鮭はかなり比重の重い産物であったようです。また、遠く北部の諸藩と、凍（こご）り咲きといいまして、

卵を持っている魚を幕府への献上物としたのです。その献上物たる鮭の捕れる所はどこか、そななことまで決まっておりまして、鮭は他の魚とは違う扱いを受けておる。それから、よく出てまいりま

すのは、御魚川という所がありまして、そこから捕れる第一番目の鮭は必ずその領主に上げねばいけない。これも記録にはかなり見えるように思います。これらは専ら食料として、あるいは献上物として、いわば鮭の資源の側面を述べました。

ちょっと聞いたことがあるのですが、縄文時代の前期に、いわゆる台木式土器（円筒形土器）があるわけです。その土器の出土は、岩手・宮城地方にまで及んでいます。土器をそのような円筒形に作るのは鮭を保存するためではないか（入れるとちょうど一匹入る）と思うんです。それが証明できれば面白いと思つています。なお、遺跡からは鮭の遺物はほとんどないので、鮭鱈文化論の一つの弱点かとも思います。

大林太良 司会者のほうから補足致しますと、今、鮭鱈の考古学的出土例が少ないということですけれども、かつて考えられていたほど少なくはないようです。奈良の国立文化財研究所の松井章さんが、たしか一九八五年ごろ、いわゆる鮭鱈文化論についての論文を『考古学研究』という雑誌に発表され、出土例をまとめておられます。

それから、鮭の大助に関して蛇足を加えますと、北米の西北海岸から北海道のアイヌの辺までは鮭が最初に上がつてくるとき、いわば鮭の漁期の最初のときに儀礼が行なわれるのが普通です。ところが、鮭の大助のばあいはどちらかというと、鮭の漁労がかなり進んでもうじき終わるという頃になつて、そういう鮭の儀礼的な取扱いが行なわれる。この辺に一つ問題があるのではないか。また、私の記憶ですけれど、地方によつては、大助・小助という名前でもつて一対として考えられている。そして、大助伝承があるのはだいたい

新潟県のあたりまで、それから南のほうに入ると私の知つてゐるかぎりでは、鮭の大助の伝承はないのではないかと思います。大友さん、昔話の場合には鮭の主というような観念は出てこないのであります。

大友義助 伝説の中では川魚の王様というふうに出てくるのではありませんか。

でも昔話には出てこないよう思います。

大林太良

それでは、松原さん、何かありましたら。

松原孝俊 朝鮮半島に鮭の伝承がほとんどないので、伺いたいのですけれど、日本では鮭と祭りとの関係はないんでしょうか。

大友義助

先程申し上げた例はほとんど祭りに関連しております。

それですので、「鮭の大助今のはる（下る）」という日にはかなり

まちまちで、一番最初に挙げました例では十二月七日、あるいは湯

殿山の縁日ということで、湯殿講とか八日講とかいう名前になると 思います。湯殿山にお参りに行く人々が行屋に集まつて三日間なり一週間なり行をして、そして七日の晩は行があける日なんです。そこでその日だけは村中の男の人、女の人、子供がその行に押し寄せてきて、その押し寄せ方が非常に盛んであればあるほど来年の稻作は宜しい。その日に下る、そしてその声でもって「鮭の大助」の言葉を聞かないようにする。それが一例です。

それからもう一つ、旧十月二十日というのはこの行を行なう所が多かったのですが、この日は恵比須講の祭日です。そのほか十月十五日というのは真室川町大沢の小国の大日様と申しましたけれど、この日は大根や蕪を食べない日としているんです。先程の大日様を持つている家の伝承では、この日、義経が訪ねてきたといいます。

北国落ちの義経ですから、身を隠している。そのためにはその家では義経を大変粗末に扱つた。でも、義経はお礼として巻物を置いていたそうです。あとで義経と知つて粗末な大根しか食べさせなかつたので、大変悪いことをした、というので、以後その村全体では菜や大根を食べない日としたわけです。このように、ほとんどの日が何らかのいわれをもつていています。

松原孝俊

そうした祭りが冬至祭のような冬祭りの典型的なものと見ても宜しいわけでしょうか。そしてもう一つ、鮭は川の王様だということですけれども、もちろん鮭は海に還入しますね。すると、祭りは、今度は海の世界（朝鮮式にいいますと龍宮）との関連はな

いのでしょうか。

大友義助 後のほうのご質問からお答えしますと、明らかなことは話の中には出てこないよう思います。こういう物語的なものが筋として行なわれているのは、やはり山と川と海という観念があるのだと思います。ですから、この日夜待ちをする、ヤナを外して鮭を取らないようにする。それは経験的に、全部ヤナで捕つてしまえばこの川にはあと四、五年は鮭が上がりこないということを知つていたのだと思います。この鮭の循環をどこかで断ち切れば、自分の村では鮭が捕れなくなる。だから、資源を確保する意味で夜待ちや祭日を設ける。合理的に考えるとそういうことになろうかと思います。

それから鮭に関する祭り、一年の終りの収穫祭のような意味合いはないのかということですけども、川の稼ぎをやつていてる人にとっては、まさにそのとおりであると思います。山と田んぼの働きをし

ている人から見ても、その意味合いは相当あるのだと思います。季節的に旧十月十日といい、十二月七日といい、もう雪の季節で、収穫が終つて田畠の仕事も全部済んでいることであろうと思います。しかし、そのことが収穫祭に全部重なるということでもないような気がしているところです。

萩原真子 大友さん、さきほど縄文の古い時代のことをおっしゃいましたけれど、日本海の沿岸、太平洋の沿岸もかなり南のほうまで

縄文期に大型の海獣狩猟が行なわれて、その遺跡から骨がかなり出てきているんですね。それがアザラシだったりクジラだったりする

んですが、日本の沿岸地域の古い時代の人々にとって、鮫鱈と同時に大型の獲物というのも、かなりの比重を占めていたことが想像されるわけです。北のほうでは、海の主というのはシャチなんですね。シャチが主である場合と、シャチがもつと別の存在の使い、海神の使いである場合と、いずれにしましてもシャチは大きな存在なんです。で、私は日本でもシャチの伝承がないかと思ってかなりさがしましたけれども、どうもシャチは出てまいりません。ただ、函館のキキョウ遺跡というところから、ごく最近ですけれどもシャチの土製品が出て参りました。土製品というのが大変面白いんですけれども。だから、古い時代にシャチというのは何らかの意味を持つてたと思うんです。これが、日本の口承芸芸学会の皆さんの中で、そういうことをご存じの方がありましたら教えて頂きたいと思います。

大林太良 ことにアイヌにおけるシャチに関する観念とか、ぜひ、この関連でお話頂きたいと思います。萩中さん、いかがでしょうか。

萩中美枝 アイヌの場合、シャチは熊の山の神に対して、海の神

なんですね。シャチの伝説はものすごく多いです。非常に優しい動物として書かれることもあります。さきほど鮭の話が出ましたのが、鮭はやはり川にいるものとして考えたい。知里真志保は鮭漁も昔は川漁だけであったと書いていますね。海を司る神としてシャチが存在するということです。

大林太良 さきほど松原さんのお話の中に鯉の話が出ましたけれども、朝鮮の鯉の伝説は中国の民話に出てくる鯉と非常に似ているのではないかという感じがします。どなたかコメントしていただけないでしょうか。

伊藤清司 鯉が竜の息子だという、そして天に昇るお話だったと思いますが、細かいことは別として、ほぼ似たような話が多分中国にあつたと思います。具体的にどうかといわれるに困ってしまうのですが、私は多分今の朝鮮半島の話は中国大陸との関連性が非常に強いと思います。それから、ちょっと関連しまして、全く思い付きですが、「I-Y-O」といつていますが、中国でも魚のことを「Y・ロ」といつております。そして、魚は多分、中国料理を食べると分かりますけれども、最後に魚が出来ますね。あれがシンボリックで、非常に豊富であることを表わすわけです。アマル（余る）という字と同じ音でありまして、富の象徴だというようにもとれますので、あるいは今までのお話がそういうことつながるかなとも感じて拝聴しておりました。

大林太良 日本海の問題というものを考える場合に、やはり、更に西の中国という問題を何らかの形で考慮に入れる必要があるということを示唆されたのだと思います。

松原孝俊

先程の伊藤さんのご指摘通り、放した鮭が後ほど龍宮と関係を持つ話は、例えば、『搜神後記』などにもある話かとも思っています。確かに、朝鮮半島の話は中国からの影響を受けたものであるかと思います。私は、むしろ荻原さんに伺いたいのですが、やはり朝鮮半島で熊はほとんど語られることがないのですね。神話レベルで語られるものは、ほとんど民間レベルでは採取の対象にもなりませんし、あるいは、仮面劇などで、仮面にかぶられることもありません。ほとんど親しまれることはないんです。このアムール川地域では、熊と虎というのは一対のものとして考えていいのでしょうか。

荻原真子 一対とは、どういうことが一対なのかとも思います。私が今、伝承を洗って、テキストの間で構造的に内容的にパラレルが認められるのは、虎とシャチの話なんです。で、熊とシャチの話、これはパラレルに出てくるんです。ところが、熊と虎の間に話としてパラレルがどうも認められないような気がします。そういう意味では、虎と熊というのは対にならないように思うのですが。ただ、一緒に出てくることはありますね。大林さんが先年ご紹介なさったウデへの起源神話で、兄妹婚が先にあって、その兄と妹から生まれた男の子と女の子のうち、一人は熊の通り道に捨てられる、もう一人は虎の通り道に捨てられる、で、熊に捨てられた子供がウデへの子孫になるわけです。そして、虎に捨てられた男の子、人間からは子供が生まれなかつたという話、それが朝鮮半島の檀君神話と結び付くということを大林さんが前におっしゃっていますけれども、私もそのとおりだと思います。そういうように虎と熊が一緒になつて

出てくるというのは、一つはオロチの神話にやはり熊の領域と虎の領域というようなことが出て参りますけれども、ただ、それは全体からいうとむしろ、例外的なあり方でして、虎と熊は対というふうには考えられないような気がします。伝承の性格からいうと、虎と熊は婚姻譚ではそいつた出方をしますけれども、先程お話をしましたように、山の主といつても、熊が山の主であるというのは、熊を掌握する熊族の主であって、山全体の、陸上の、獣の主という特長を帯びるのは話の加減でそうなることはあっても、本質的には熊が全体の主であったというようには考えられないのです。でも、もともと主的な存在というのは、ちょっと話が飛躍するかもしれませんけれど、どうも狩猟民の世界では一つの生業領域を考え、そういう生業の中での主となるので、宇宙全体、自然界全体の中での主といいうような広い世界観ではない、ような気がします。松原さんにお聞きしますけれど、檀君神話は建国神話ですね、建国神話に虎や熊が出てきますが、例えば、韓国に英雄叙事詩のジャンルというのはあるのでしょうか。

松原孝俊 英雄叙事詩のジャンルはないでしょうね。それを語るものとしての叙事詩はないと思います。

荻原真子 建国神話の中の英雄はやはり選ばれた存在、異常出生といいますか、その出生自体が異常であるという英雄叙事詩の中の英雄の性格があると思うんです。そう考えていきますと、シャーマニスティックな特性は檀君神話にはないのでしょうか。

大林太良 それはやはり、あるといえばあるのじゃないでしょうか。

松原孝俊 再び荻原さんに聞きますが、説話の中において、虎の領

域と熊の領域はどう分けられるのでしょうか。例えば、虎は山の神なのかな、熊が動物の主ならば、虎は熊とどういう関係にあるのか。両者の関係は、朝鮮半島では極めてきちっとでありますので、シベリアでのことをお伺いします。

荻原真子 虎の伝承は地域的にかなり限られています。シベリアのほかの地域に虎の話が出てくることはないわけで、シベリアのほかの地域での森林獸の一番大型の動物は熊です。虎は沿海州の南のほうで、それから奇妙なことに、サハリンのニブヒの間に大変たくさん出てきます。その範囲で考えてみると、主的な（私は無償の愛）を施すのが主だと思っているのですが、本質的な、獲物を掌握して、それを人間に与える主はまず虎が第一に優先的に考えられる。そこへいくと、熊の性格はどうも違うように思うのです。話の中で、どこからどこまでが熊の領域で、どこからどこまでが虎の領域かということではありません。もう少し、別のいい方をしますと、多分、時間的な差異という問題だと思います。あの地域の基層文化の中のある領域を虎が占め、そこへ熊の話が重なって出てくるというように考えていました。熊の話の中には北方のツンケースとの関わりがあり濃厚に出てきます。アムールの文化というのはいくつもの層が重なり合っているわけで、一番基層にある話として虎の話がある。一番下かどうか分かりませんけれども、それとパラレルにあるのがシャチの話だと思います。シャチが縄文の遺跡からも出てくるということは、かなりシャチは古くからあつたと私は考えています。そこで、あの地域の原住民の世界がツンケースの影響を受け、言語がツンケース化していくわけですけれど、そのツンケース的な森林地

帶からやって来る文化の中の一つの要因として熊の話が出てくる。おおざっぱにいえば、そのように考えています。ですから、今日の現象面では、結果的に虎と熊は同次元にあるのですが、もともとはそうでなかつたと思います。

大林太良 今の荻原さんの指摘は大変重要なと思います。つまり共時的には一つの対立する構造を成していても、発生的には違う文化に属する。そして、アムール川の場合、沿海州の場合にはツンケースのエクスパンションが非常に重要な歴史的な背景を成すのではなかいか、そういうことだと思います。それから、また先程の荻原さんの発言の中で、生業領域の中の主ということがありました。これもまた、大変重要な指摘ではないかと思います。つまり、このごろの考古学でもキヤツチメントということばをつかいますが、自分の住んでいるところから出でていって、いろいろな獲物を取つたりする範囲のことです。これはアイヌのイウオールなどとも少し重なる部分があるかもしれませんけれども、また多少違う概念だと思います。今まで、非常に漠然として考えられていたそういう動物の主、あるいは動物の中のそういうヒエラルヒイを考える場合に、生業領域という言葉でかなり具体的な地域を考え、その中の体系を考えたらどうかという指摘は非常に面白いと思います。ただ、それと同時に、そういうものを越えた宇宙というのもやはり考えられているのではないかということも、一つの可能性として無視は出来ないかもしれない。私、前から興味を持っている問題があります。カムチャツカから北海道にかけて、山の神が海獸を、あるいは海の魚を捕つてきて、そして山の上でそれを食べる。だから、山の上にいろいろな

骨があるのだという伝承が点々として見受けられますが、こういう相当広い範囲にわたる海と山の関係というのも面白い問題じゃないかと思います。

また、先程、熊とトドの戦いが沿海州のほうにあると伺いましたけれども、動物同士の争いが日本海地域についても口承文芸における一つのテーマではないかと考えます。一つの例を挙げますと、有名な青森の龍飛岬の黒神が龍にのっている。そしてまた、男鹿半島の赤神が鹿を使いとしている。この二つの神が十和田湖の女神をめぐって争う。ところが、結局、黒神は失敗してしまって、ため息をついたら、北海道と本州がその勢いで離れてしまったという有名な伝説があります。こういうような動物、この場合は鹿と龍の争いですけれど、違う種類の、あるいは、違う宇宙領域を表わしている動物同士が争う。先程の熊とトドの争いもそうだと思いませんが、そのような例につきまして、もう少し何か、具体的な例を挙げて頂きます。

荻原真子　動物同士の争いの話として、熊とシャチの話がたくさんあるんです。ただ、これは話が少し面倒になってしまって、實際は熊と争うのは、水界の主……アザラシの場合やシャチの場合もありますが、海のそういう主、それから魚の母親の場合や、あるいは、シャチから生まれた人間が陸へ上がりて熊狩りをする。そのときに何を武器にするかというと、伝統的にはこの地域で熊を狩るときには弓矢かヤリを使うことになります。ところが、海で生れたその英雄は刀を使うんですね。その刀はシャチの背鰭なんですね。そのシャチは、陸に上がったときは自分の背鰭の刀を置いて人間の姿に

なって、海岸で遊戯をしたり、ゲームや狩りをする。このシャチが刀をたまたま忘れていたところ、人間がその刀を持って山へ入つて熊を狩るわけです。その刀でめったやたらに熊の頭に切りつけるのですが、これはルール違反なのですね。熊の立場では、苦しめないで急所を一息について殺してほしいのに、やたらに額を傷つけられたり、鼻をそがれたりします。これじゃかなわないというので、その英雄の兄弟を呼んで、おまえの弟はけしからん、といつて決闘を申し入れます。で、その決闘をする日というのが、だいたい、海岸に鯨が打ち上げられたときということになります。鯨が海岸に打ち上げられたときに、熊が山から下りてくる、英雄もやつて来る、そして介添えといおうか、証人として熊の父親も人間の父親も下りてくる。そこで、熊と人間が決闘するのですが、両方とも死んでしまいます。熊の父親も人間の父親も泣きながら自分の山や家に帰るという話があるので、ここで、水界で生れた英雄がシャチを親にしていてる場合、水界と山という対立とも考えられます。また、刀を鉄文化ととらえれば、これは全く異質な外来文化です。外来の異質なものを持った人間を、山の熊が表わす世界、つまり、人間のそれまでの伝統的な狩猟民の世界が排斥するというよりも深読みできることもありません。そういう話はどちらかというと神話のジャンルに含まれますが、話としては、先程もいいましたように英雄叙事詩的な傾向を持っています。というのは、魚から生まれた子供が異常に急速に大人になる、それが非常な力持ちになるという、並の狩人ではないのです。そういうわけで、属性としては水界に起源しながら、しかも人間ではない人間というようなことで、このよう

な話の場合は獸と獸の対立とも考えられます。

それからまた、アムールではなくてアイヌにある、大変興味深い

話ですが、動物と動物が結婚するというのがあります。メカジキに他の動物が恋をして一緒になりたいという話がアイヌにはあります

が、この類の話は沿海州にはありません。

大林太良 いろいろ面白い話が出ました。これからは、フロアのほうからご自由に質問下さい。

井上隆明 大友さんに伺います。私、一二、三日前、偶然に天明三年の無窮会文庫にある北海道領蝦夷地の旅行記を見たんです。天明三年は大飢饉でしたから、その中に今年は鮭が捕れない、つまり、飢饉の年には鮭が捕れないというくだりがあつたんです。要するに、

鮭という魚は豊作のイメージが伴うのではないかということが一つ。それから、ドイツでニシン (Herring) は太陽のシンボルであって、やはり先程のお話のように、かまどの上、火の上に置く。鮭とか鱈とかニシンという魚は回遊性 (sunward) があり、太陽の光輝のイメージを伴っているために大変珍重されたのではないか。あの骨も一点から分かれています。つまり、おたずねしたいのは、鮭も豊作のイメージがあるので珍重されたのではないかということと、もう一つは、太陽周回といいますか、鮭にはそういう習性があるために、あるいはところによっては太陽の神、または、ほかからやつて来た渡来神のようなイメージの伝承がないかということの二つです。

大友義助 鮭の豊作と関連するイメージは、初めて聞きました。今まで特にそう感じたことはありませんでした。また、そういう趣で聞いたこともありませんでした。お伊勢さまや大日さまとの関

係も別ないように思いますが。ただ、渡来神という性格は観念の裏のほうには存在するように思います。

井上隆明 ちなみに、秋田では鱈は東からやって来るといわれています。

岡見正雄 私は、語り物について日本海文化というものが大きな意味をもつていて、と思うのです。例えば、文献でいうと、義経は十三の港から蝦夷へ行つて、あの十三はたしかに津軽の十三で、津軽の十三は安倍氏の伝承です。そういうことで関係があると思いますが、ずっと京都のほうまで、小浜とか敦賀と結び付いていたことが、私は、口承文芸と関連していると思うのです。例えば、小浜に八百比丘尼の伝説がある。また、戸川さんがお話を下さったような、羽黒山とか鳥海山の文化も、白山や立山や黒百合姫と結び付いています。昔話においても日本海諸地域のあいだの結び付きが非常に多いのではないかと思います。私は秋田の出身で、日本海文化と口承文芸の関係を具体的に伺いたいと思って、関西から参ったんだでございます。

大林太良 貴重なご指摘をありがとうございました。確かに、日本海文化といいましても、非常に範囲が広いわけでして、その中における口承文芸の問題を取り扱うにはいろいろな切り口があると思います。実は、急病の直江さんの代わりに司会をすることになつて、昨晩、今回の発表者はどのようなお話になる予定かということを伺つたところ、動物との関わりを共通テーマにすればまとまるのではないかと、そこに限定させて頂いたわけです。もちろん、これは日本海文化における口承文芸のごく一部で、一つの切り方にしか過ぎません。

ない。もっとほかの切り方がたくさんあると思います。しかし、一応動物と人間との関係、動物と動物との関係、そういうものが日本海の周りの地域において、やはり口承文芸のテーマとして非常に発達しているということは言えるのではないかと思います。

野村純一 萩原さんのなさっている鮭の扱いは、採集狩猟民のもつ鮭の扱いだらうと思うのですね。ただ、同じ鮭の話を取り上げても、

大友さんの発表の場合は、これは、採集狩猟民の伝えてる鮭の話ではない。最上川沿いの鮭の民俗、それに関わる人たちを見ましても、稻作農耕民です。川を遡つてくる鮭を待ち構えていて、農民が捕まえるわけです。川に係わる農民たちが捕まえるのですね。ですから、採集狩猟民たちのイメージとはレベルが違うのではないか。

つまり、井上さんが、鮭には豊作のイメージがあるだらうと指摘なさつたが、まさしくそのとおりです。鮭に限つて「よ」というのですね。ハタハタの、黒ダイの、なまずの「よ」とはいわないわけですね。この鮭の「よ」は果たして魚なのか、それとも日本語の「よ」には、齢とか代々の代だとか、稻の穀靈の「よ」とかがある。私は鮭の「よ」には穀靈のイメージを稻作農耕民がもつていて、だからこそ、鮭だけに鮭の「よ」と民俗語彙を使つてているのではないかと思つてゐるんです。

大林太良 非常に面白いご指摘で、おっしゃるように、稻作農耕民

の所における鮭の考え方と、また、採集狩猟民の所におけるその考え方は当然違ひがあると思います。今の野村さんのご指摘は、北太平洋地域の鮭に関する伝承で、なぜ「大助」だけが非常に違うのかを考える上において、示唆に富るものではないかと思います。

残念ながら、予定の時間が参りましたので、今回のシンポジウムはこれで終了させて頂きたいと思います。